

## 第 50 回釜ヶ崎越冬闘争 基調

いよいよ今年も本格的な冬がやってきました。建て替えのためのセンター閉鎖や猛暑、台風など、働く者、野宿を強いられる者にとって厳しい一年でした。

大阪では道頓堀や黒門市場、USJなど外国人旅行者があふれんばかりに詰め掛けており、新今宮駅や新世界も大量の旅行者が行き来し、ホテルや民泊を求めて区内奥深くまでやってきています。

さらに 20 年の東京オリンピック、25 年の大阪万博を当て込みホテルなどの建設のみならず道路工事に至るまでいたるところで建設ラッシュが始まっています。

こうした観光客の増加は一部の地域経済を活性化させ、大量のドラッグストアが新規開店し、スーパー玉出やドン・キホーテといった旧来の安売り店の商品価格も押し上げて、地域労働者、生活者の家計を圧迫するようになりました。地域の簡易宿泊所(ドヤ)でさえ、土日祝祭日は 200 円割り増しなどというところが出てきています。

こうした現場の動きは再開発と呼ぼうがジェントリフィケーションと呼ぼうが確実に街の変化と地域の労働者の生活の変化を推し進めています。

### 日本社会の動き

私たちをとり囲む日本の社会状況は、安倍内閣がその圧倒的な議席数を背景に次々に大資本のための政策を打ち出し、国会審議もおざなりに強引な議会運営で議案をとおして行っています。人権を無視し、企業のために大量の外国人労働者を労働力(もの)として輸入する奴隷労働法ともいえる法案を通したり、市民生活の根幹を支える水道事業を民間企業に売り渡しています。外国人労働者に対する人権無視、奴隷的扱いは、国内の労働者に対する扱いとしても、差別をテコとした労働法の無視、条件の切り下げとして労働市場に反映されるであろうことは明らかです。水道民営化も世界の例を見れば値上げや採算の取れない地域への供給停止など、市民生活に大きな影響を与えます。

司法の場では裁判官の任命権を盾に都合の良い裁判官を集め、最高裁が再審決定を覆すなど国家の威信を保つためにえん罪-再審を認めなかったり、森友-加計学園問題、「桜を観る会」のような政治の腐敗に目をつむらせ、福一事故の責任者-東電幹部を免罪するなど三権分立を否定する「政権に付度する」司法体制を作り上げています。

ますます大企業、外国資本、お友だち、支持者のための優遇政策を突っ走っています。

また、米国、米軍追隨の日本政府は、沖縄民衆の選挙による民意を無視して辺野古新基

地を強行し土砂投入・工事強行を続けるとともに、「慰安婦」問題・徴用工問題などで排外主義を煽りながら中・韓・朝鮮を敵視し、南西諸島への自衛隊基地建設・配備によって米国と一体となりアジア臨戦態勢を整えようとしています。

そのため国民統合・挙国一致体制を創ろうと「道徳」教育の導入、憲法からの「人権」項目の削除と「国家のための個人」づくりと自衛隊の軍隊化の明記をめざし、改憲をもくろみ、天皇代替わりに莫大な国家予算を使いながら天皇制を強化しようとしています。

こうした流れの中で、国民の年金を浪費し企業の株価を操作してきた安倍政権は、社会保障費をますます削り、生活保護費を切り下げ、莫大な兵器購入予算に変え、さらに消費税を10%に上げ困窮者を絞めつけています。

## 釜ヶ崎をめぐる問題

いよいよ4月にセンターが閉鎖され、建て替え工事が始まろうとしています。

センターの建て替え問題は、自らの営利のため事業拠点を創るため跡地を私たちから奪おうとする商業資本と労働施設を守ろうとする私たち労働者とのせめぎ合いであり、地域の発展を目指す人たちとの協働の場でもあります。

センター建て替えにともなう街づくりはこの間大阪の行政当局が悪徳政治家と御用役人、御用学者が進めてきている「民営化」の名の下に市民の財産、労働者の財産を資本に売り飛ばそうとする目論見との闘いです。

彼らの好きなように街づくりが進められれば、野宿をせざるを得ないなかまたは排除され、生活保護のなかまや建設労働で生計を立てている仲間も散り散りに追い立てられ、福祉施設や飯場へ囲い込みを強られるようになるかと思われます。

私たちはこの間の闘いで、労働施設(あいりんセンター)の商業資本への売り渡しは阻止したものの建て替えが差し迫る中で新センターの中身やセンター利用者の居場所機能の移転についてはまだまだ見えてきてはいません。それは第一、第二市営住宅、医療センターを荻小跡地に移転する大阪市がセンター跡地に地域住人や労働者のための新しい施設を創る=予算を付けることを渋っているからにはほかなりません！西成特区構想などと言いながら大阪市は何も地域の将来に展望を持っていないのです。

大阪府・市はゼネコンや大資本を儲けさせようとする大阪の悪徳政治家たちの企みによ

って '25 大阪万博なるものを誘致します。‘70 万博のためにつくった労働力供給基地「釜ヶ崎」の問題解決もできないうちにまた万博を行い、再度同じ轍(集めた労働者の使い捨て)を踏むなど考えられない暴挙です。

まず、再び「建て替えが伸びれば政治家の『政治決断』によって計画がつぶされる」などという行政の脅しに屈せず、①「公用地は絶対に資本に売り渡すな！」と声を大にすること。

そして、②「センター建て替え、街づくりの過程で行き場を失う失業労働者の問題を解決する=センターの居場所機能の移転問題を解決する」こと。そして「これらの問題(地域の将来)をどう考えているのか大阪市に明らかにさせること」です。

これが今越冬闘争の中では大きな課題です。

そして、私たちは「釜ヶ崎へ行けば何とかなる」という想いに応え続けてきたこの街の良さ、多くの人たちの想いを守ることによって、今この街に暮らすなかまとともに、これからもたどり着くであろうなかまたちがこの街で再起ができる、あるいはこの街なら排除されることも無く安心して暮らせると思えるような街となってくれればと思います。

この間の越冬闘争や夏まつりでのなかまたちへのアンケートではいろんな意見が出てきました。

建設日雇だけで無い職業紹介。高齢者でも働ける仕事の紹介。若者への仕事(建設労働以外)の紹介。職業訓練の充実。女性への職業紹介。託児所、保育所の設置。縦割り行政に縛られない何でも相談できる相談施設。住人たちが集える場所を持った施設。災害避難場所として使える施設。などなど、ほんの一部の抜粋です。

今、香港やフランスでは多くの労働者・市民が政権批判の声を上げています。私たちもかつて多くのなかまが団結して声を上げることによって寝場所や仕事=シェルターや特掃を勝ち取ってきました。これはまだまだ満足できるようなものではありません。

今年の越冬闘争は目の前でなかまたちが餓死・凍死をするのを防ぐとともにこの街がすべての個人にとってやさしく住みやすい街となるように人権と平和を求めてそれに反するような行政施策、国の政治を見据えながらなかまたちの団結を創り出し、声を上げていく越冬闘争になればと願っています。